

馬との付き合いは瞑想に近づいていく

馬に教わるリーダーシップ

第12話 ゼロ・センス獲得の「道」と所作

2015年3月5日（木） 小日向 素子

かれこれ、3年ほど、くうまさんの牧場とかかわらせていただいていたのは、馬との付き合いは「瞑想」のようなもので、牧場の暮らしは「道場」のようだ、ということ。あくまでもイメージなのだけど、禅の修行のようなものとすごく似ているのではないかと思った。

馬を先生とするプログラムを提供している先駆者の方々の本を読むと、やはり「TAO（道）」とか「ZEN（禅）」という言葉が出てきている。

日本には、「道」のつくメソッドはたくさんある。

そういえば！会社をクビになった後の動きを振り返ってみると、実はゼロ・センス獲得の修行メソッドを自分なりに試していたように思う。

まずは「本」を使ったもの。「BOOKnite」というパーティーを開催して、例えば“ART”、“深イイ漫画”、“Small”などのテーマを掲げ、本を一冊持ち寄り、紹介しあう。はたまた、学校では決して習わない日本の歴史を学ぶべく、講師の選書で5冊を取り上げ、全5回の連続講座を開催したり、主催側で招待したメンバーだけによる哲学講座で「対称性人類学」をやったり…とにかく既存の思考の枠を壊す、そして、超えていくための仕掛けを設けた読書会の開催を試みていた。

読書会は結構楽しくて、第9話の冒頭で引用したチェンバレンの『馬の自然誌』にあるように、本を読むことで生き生きと想像力を巡らすことができるのであれば、馬とのかかわりと同じような効果が望めるのだろう。

けれども、本は何せ身体性に欠ける。ゼロ・センスを身につけるには（当時はゼロ・センスという言葉はなく、既存の思考の枠を超えるという視点で考えていたが、実際はゼロ・センスという自分の中から溢れ出るそれが欲しかったのだと思う）、脳と身体とが繋がっていないと、実践というか「日常の振る舞い」「暮らし」に落ちにくいと思った。

それで手を出したのが茶道。当時、気に入っていた岡倉天心の『茶の本』。編集者の松岡正剛さんによれば「『茶の本』はまるで透き通った虫の翅のように薄い本であるが、その翅がひとたび震えると、日本精神の真髓が遠くまで響いていくものになっている」という本だ。外資系に長くいてグローバル経済の価値観にどっぷりつかっていた私にとって、身体を通じつつ、新たに思想を再構築する修行にもってこいなのではないか？と「茶道」を始めた。

しかし茶道の稽古場通いは、たった1年半で終わった。合計20回くらいのお稽古と、お茶会に2度参加した程度。初歩的所作を覚えるのが精一杯ではあったけれど、その背後にある理、師匠や共にお茶を飲む方々への振る舞いの作法、着物のこと、器のこと、掛け軸、茶室そのもののしつらえ、などなどに魅了された。そこには自然や宇宙と繋がる感覚もベースとして存在していることも分かった。

茶道や武道など「道」のつくものは、「道」を極めると達人と呼ばれたり、仙人の域に達するようなイメージを持っている。道を極めるには「いまここ」の精神は基本として必要であり、それはゼロ・センスと近い感覚で、身につけることは当然というか、基本なのだと思う。

でも私の茶道体験では、伝統的な決まりごととか、芸術性というところについて目が行ってしまっただけで、「いまここ」とか「ゼロ・センス」といった感覚と向き合うことができなかった。

馬の数々のメソッドは生きることに直結している

「馬」はどうだろう？

くうまさんの牧場に行った初日、「出会い体験」というプログラムを受けた。馬とはどういう生き物か、馬とコミュニケーションを取る、「出会う」ためのプログラムだ。

「馬の視界は350度くらいです。頭の真後ろの10度以外は全部見えています。真後ろには立たないでくださいね」といったところから始まって、

「馬と仲良くなるために大切なことが3つありますが、何だと思えますか？」などなど。

ホースセラピストでトレーナーの小森さんのガイドで、馬という異界と出会っていく。

自分よりも身体が大きく、力では圧倒的にかなわない動物、それなのに自分のそばにいてくれる生き物なのだと、だんだん気がついていく。

かたわらに立ち、おそるおそる、たてがみの根っこに手を伸ばす。

ふわふわと柔らかくて暖かい。

この暖かさ、鼓動や筋肉の反応。「命」と向き合っている感じがした。

さらに、体重400kgの馬に、自分の思う方向に歩いてもらう。

手綱を引っ張らずとも、後についてきてくれる。

すごい。

異なる生物、異界と繋がる感覚。

これまでに、全部で15-20回くらい馬に乗る機会があったように思う。

馬装の作法、

馬の手入れの作法、

馬との歩き方、

馬房の掃除の仕方、

乗り方、

服装、

餌やり、

牧場の作り方、

などなど、茶道同様にメソッドがある。

茶道のメソッドは「暮らし」から少し離れて、「芸術」の世界の話に感じるのだけれど、馬の場合は、何せ命のお世話の話なので、「生きること」とか、「暮らし」そのものになるところが違うのかな？と思う。

なんというか、馬の修行は、ゼロ・センス剥き出し！

とはいっても、ただ牧場に行ったり、乗馬に行くのでは全くダメで、適切なプログラムと、良きガイドが必要だけれど…。

茶道や武道などの方々も、基本の「いまここ」「ゼロ・センス」の鍛錬に、馬を取り入れたら良いのに！などと思ってしまうのは浅はかでしょうか？

「道」のつく世界の方にいる方に、「ゼロ・センス」とか、「修行」についてもっときちんとうかがい、この連載で報告したいと思っている。

「人と寄り添うことを選んで進化した」

現時点の私の考えでは、やっぱり、ゼロ・センス獲得には「馬」がよさそうだなあ。

でも「馬と暮らす」は、普通の人（都会暮らしのサラリーマン）には、「ないよなあ？」。

馬は、いる場所が限られる。

馬以外の動物と同じことはできないのだろうか？

人間に寄り添ってくれる馬以外の動物。

まず思い浮かぶのは犬。

犬は飼い主の気持ちを重んじすぎてしまう。人間に近すぎる。

人間を癒す力があるイルカは？

いやいや、馬よりも出会うのがものすごく大変。そして「人を癒す」という行為をするとイルカは自分の寿命が短くなるらしい。それは切ない。

ウシ、ヤギ、ブタなど家畜として側にいる動物は？

可能性はあるのかもしれないけれど…「対話」相手としての歴史が浅い。

やっぱり馬、なのかなあ。

ネイティブアメリカンたちは、馬のことを、マジックドッグとよんでいたという。

彼らの神話はとてもすてきだ。

昔、地上に存在する生き物はみな同じ言葉を話していた。創造主の意図の通り、すべての命は調和して存在していた。

ある北風が吹き始めた日に、噂好きのコヨーテが人間のそばにやってきて言った。「二本足の生き物は、自分たちだけが理解できる新しい別の言葉が必要だ」と。そして人間たちはそのようにした。創造主はその様子を天から眺めてお怒りになり、コヨーテに、キャンプファイアの外に出て行くように命じた。

さて、二本足の人間たちは、自分たちの言葉ばかり使うようになり、次第に他の生き物たちと共有していた言葉を忘れていった。人間たちは、他の生き物のことを考えることをしなくなり、自分たちが他より優れていると考えるようになった。人間たちは他の4本足の生き物たちを狩るようになった。他の生き物たちは人間を恐れて、森の奥深くに逃げた。

動物たちはもはや人間を信頼しなくなった。動物たちは、創造主のところに行き、人間たちは「敵」となってしまったと訴えた。創造主は動物たちの訴えに耳を傾け、人間たちがいつも他の動物たちを支配しようとしていることを認め、その罰として、巨大な地震を起こし、大地を引き裂いて、動物と人間を永遠に分かつことにした。

動物たちは無事に人間のいない淵に移動した。人間たちは突然の出来事に、泣き、恐れた。彼らはそのとき初めて、自分たちのわがままなやり方が創造主をどれほど怒らせたかを知った。そして、動物たちに許しを乞った。しかし動物たちは、二本足の生き物は信用してはいけないということ学んでいた。地震は続き、大地の亀裂はますます深くなった。そして、人間たちは永遠に他の動物たちから離れて暮らさねばならないと悟った。

その最後の瞬間、馬と犬が陰から飛び出て、溝を飛び越えて、人間の側の淵にやってきた。二本足たちは歓喜し、犬と馬を、大切なお客様として、永遠に共に暮らすことを誓った。創造主も喜び、二本足たちに、馬と犬が自らそばに来てくれたことを忘れないようにと言った。

ということで、馬はネイティブアメリカンの中で、人間に与えられた特別なギフトであり、生まれながらの友であり、先生であるとされている。

「私」と、他の「生物」「自然」とを繋いでくれる、貴重な存在が「馬」なのだ。

馬の背骨は、人を乗せるがためのようにくぼんでいる。

そんなことをしたら背骨が脆くなるのに。

馬の歯は奥歯と前歯の間に隙間がある。

まるで、ハミ（手綱を繋ぐのに必要な道具）を入れるがためのように。

「まるで、人と寄り添うことを選んで進化したかのようだ」と、出会い体験プログラムの際に、こもりさんが言っていた。

その言葉の意味が、時が経つほどに腑に落ちてくる。

今回は、馬がゼロ・センス獲得の第一歩として可能性があるということを書いた。

次回、もう一步踏み込んで、今回最初に書いたように、馬とのかかわりがなぜ瞑想と感じるのか、なぜ牧場が道場になり得るのかということ、牧場体験を基に書いてみようと思う。

| このコラムについて

馬に教わるリーダーシップ

外資系IT企業日本支社の部長としてマネジメントに奔走していた「私」は、リーマンショックに伴う業績悪化から突然解雇される。新規ビジネスの立ち上げを模索する中、以前から疑問を抱いていた自分自身の統率力やコミュニケーション能力に向き合うきっかけがやってくる。それは偶然からの「馬」との出会いだった。

群れで生きる馬は、そのときどきの生存環境に最もふさわしい資質を持つリーダーに一期一会で従うという。言葉を理解しない馬と意思を疎通するうちに「私」は自分なりのリーダーシップ、そしてコミュニケーションの本質について学んでいく。

人間の振る舞いを鏡のように映し出す馬を通して、卓越したリーダーシップ、優れたチームワークとは何かを探し求めていくオン・ザ・ウェイの物語。